

第三回国際コロキウム 「異なる視野から見たヨーロッパ中世」および特別セミナー「ムムデハリスモ」と  
「モサラビスモ」 .. 中世イベリア半島におけるキリスト教世界とイスラーム世界の文化交渉

二〇一七年十月十二日〜十五日 報告 久米順子

本コロキウムは、非欧米圏でヨーロッパ中世研究の諸問題を幅広く討論するためにまず二〇一三年にメキシコで、次いで二〇一五年にアルゼンチンで催された国際コロキウムの第三回大会である。初のアジア開催となった本大会では、四日間にわたって、メキシコ、アルゼンチン、スペイン、ポルトガル、イタリアで活躍する歴史学、美術史学、ジェンダー研究などの研究者九名(うち二名はビデオ参加)と日本の研究者六名が集い、報告・議論が行われた。

なぜこのような大規模な(に見える)国際大会をひとりで取り仕切るようになったのか、そしてどのように開催費用を捻出したのかという質問を準備段階から何度か受けたため、以下、それも含めて開催記として記させていただく。

まず経緯の方だが、コロキウム発案者のひとりとして初回から関わっていた報告者には、とくに第二回大会で「次回は日本で！」という期待の声が多く寄せられた。その時点では「いつか予算がとれたら」と冗談めかしてかわしていた。実現可能性が浮上したのは、頭脳循環プログラムによる海外派遣で自分の科研費を使う機会がほばないまま一年が過ぎようとしていた二〇一六年である。若手(B)はすでに基金化されていたおかげで繰り越し可能で、ささやかなひとりで科研とはいえ二年分を

集めればそれなりの金額となった。フィレンツェという新鮮な環境で気分が高揚していたことも否めない。もしいつかやらなければならぬとしたら、それは二〇一七年しかないのではなにかという気になってしまったのである。

予算のからくりは簡単なことで、実はこのコロキウムは第一回から原則として交通費は参加者自己負担という方針でやっていた。開催側は、コロキウム期間中の参加者の宿泊・食事の面倒を見る。東京までわざわざ来てもらうわけだから数日分の宿ぐらゐは提供したいが、そのためには毎日学術的活動をしてもらわねばならない。そこで、科研費課題に沿ったテーマで特別セミナー「ムムデハリスモ」と「モサラビスモ」を同時開催し、一人当たり一回の報告につき二泊、二回報告をすれば四泊を負担、司会なども相互にやってもらう形にした。この条件で各方面に打診し、日程が合わなかったり旅費が確保できなかったりでチリ、コスタリカ、オーストラリアからは見送りの返事が届いたものの、経済的に不安定なポストドクの若手も含めて予想以上に参加の承諾が得られた。西洋中世学という分野柄、来日経験のある人がいなかった——しかし皆日本というところに関心はあった——ことが幸いした面もある。

来日組のなかで一番のベテラン格であり飛びぬけた質量の業

績をもつひとりの教授には、学振の外国人研究者招聘制度にチャレンジしてもらった。幸運にも採択され、日本の歴史学者、スペイン研究者と実のある交流ができたことはもちろん、予算の面でも非常にありがたかった。

各国からのコロキウム参加者は日本の西洋中世研究に強い興味をもっていたため、ポスドクの若手からベテランまで、日本の研究者たちにも報告をお願いした。十月という授業期間、しかも外国語での発表とあつて負担が大きかったに違いない。お引き受けいただいた方たちには感謝しかない。

頭を悩ませたのは発表言語である。スペインやポルトガルで行われている中世学の国際集会では、スペイン語、ポルトガル語、カタルーニャ語、英語、フランス語、イタリア語などは通訳なしでやるのが通例となっている。外国人には迷惑な話だが「南欧地域の中世研究者なら英語＋ラテン語系のことばくらいはわかるよね（わかれ！）」というスタンスなのだ。しかし日本でそれはあまりに無茶である。そこで「非欧米圏におけるヨーロッパ中世研究の諸問題を幅広く討論する」という本コロキウムの趣旨に反してでも、研究対象をほぼイベリア半島に限るような人選にして、発表言語をスペイン語か英語に絞る形とせざるを得なくなった。スペイン語圏でも最近では外国語とりわけ英語による業績が母語によるそれよりも高く評価されるため、とくに若手ほど英語での発表を望む傾向が強い。しかし英語偏重に対する一種のアレルギーや拒絶感情を抱えている人が国籍を問わず存在するのも事実であつて、このコロキウム開催の経緯やコアメンバーを考えると、英語だけで押し通す可能性は最初からゼロだった。

発表言語の問題は、どのような聴衆を想定するかという問題に直結する。実は聴衆がほぼゼロであろうことははなから折り込み済みであつた。というのも、結果的に発表はスペイン語と英語半々くらいとなつたが、日本の西洋中世学でスペイン語を日常的にツールとして使う人などごくごく限られているからである。しかし英語でやったところで、テーマの大半を占める中世イベリア半島に関心を持ちかつ英語の聴解力に自信がある人がどれだけいるか。同時通訳など望むべくもないし、すべての発表に逐語通訳を手配するわけにもいかない。せめて発表要旨（兼発表資料）だけは学生有志諸君の協力を得て日本語訳をつけることとした。ひとつの発表につきバイリンガルないしトリリンガル（西、英、日）表記で百ページ近くなつた要旨集は、印刷版を数十部用意したほか、PDF版を事前にネット配信し、来場者にダウンロードしてもらいやすいようQRコードをつけた。スマホで読むのは苦しいが、分厚い印刷物を持ち帰り保管する手間が省ける利点はあるかもしれないと思つての試みだった。

結果的に海外から来た研究者たちは皆で四日間の合宿をやつたようなものとなつた。その輪の中に放り込まれた日本人研究者からも活発に質問や意見が飛び交い、発表ごとに行われた討論は予想以上に充実した内容となつた。

今回は二〇一九年にメキシコかスペインで開催予定である。どこかで誰かが手をあげ続けてくれる限り二年ごとの開催が続いていくことを願っている。